

相づちの中日対照研究 —使用場所という観点から—

楊 晶

1. 研究目的

学習者の日本語による会話を分析すると、相づちの使用場所が母語話者と異なっていることが少なくない。その原因としては、日本語の会話に対する不慣れがよく挙げられるが、母語における相づちの使用に関する習慣や意識も大きく影響するのではないと思われる。よって、日本語学習者は、日本語と母語の相づち使用における異同を認識する必要がある。

本研究は、中・日両言語の相づちの使用場所に着目して、それぞれの母語話者の意識と実際の運用の両面から分析し、比較対照を行い、両者の相違を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2.1 分析資料

- ①両言語の母語話者同士による異なる場面での自然会話計 16 組（知人同士による電話会話各 4 組、初対面同士による対面会話各 4 組）
- ②紙面による相づちの使用場所に対する意識調査への回答（中国語母語話者 100 名、日本語母語話者 120 名）

2.2 分析方法

電話による日本語会話における相づちの使用場所については、先行発話を文法項目別に分類し、主に文法形式による統語的な要因を分析することにする。中国語会話については、相づちが主に文末に使用されているため、文中の相づちの先行発話の品詞について調べることにする。対面会話については、統語的な要因の他に、話し手のうなずきも分析することにする。集計したアンケートに対する回答について、統計的な手法を用いて処理し分析する。

3. 相づちの定義と相づちの形式

自然会話に使用されている次のものを相づちとみ

なされる。「会話参加者の一方が発話権を行使している間に、または発話権を終了した直後に、他の参加者が発話に対して送る談話形成機能を持った（非言語行動を含む）短い表現及びこれらの表現への反応として送られるもの。これらの短い表現は次のような 3 つの性質を持つものでなければならない。(1)他の会話参加者の発話に直接応えているが、(2)その会話参加者はそれに回答する必要がなく、(3)話し手が要求しているわけでもない。」

相づちの表現形式については、相づち詞、繰り返し、言い換え、先取り、コメント、うなずきの 6 種類を分析対象とする。

4. 結果と考察

4.1 自然会話における相づちの使用場所

2.2 で述べられた方法で自然会話に使用されている相づちについて分析し分類した結果を表 1 と表 2 に示す。

表 1. 中国語会話における使用場所 (%)

文末	文中	その他
79.6	13.5	6.9

表 2. 日本語会話における使用場所（文法項目使用率）

終止形	接続助	終助詞・間投助詞	格助詞	その他
16.4	23.7	25.6	10.9	23.4

表 1 によれば、中国語会話においては、相づちの約 80% は文末（センテンスが完了したところ）に集中している。文末に集中している原因は、一まとまり

の意味を持つ情報を伝えられたことと、文末に相対的に長いポーズが入っていることが推測される。文末の他、13.5%の相づちが文中（話の途中）に使用されている。それらの先行発話の品詞について調べたところ、その直前は名詞や動詞または語気助詞「呢」「吧」「啊」がほとんどである。会話(1)がその使用例である¹。

(1) CS：但他实际上没读完2年级,

①C1：<#>嗯—

CS：才读了1年半。这样的话呢,

②C1：嗯

CS：他实际上还不能说是「中级毕业」。

③C1：「嗯嗯

(日本語訳)

CS：しかし彼は実は2年間の勉強が終わっていません。

①C1：<#>エー

CS：まだ1年半しか勉強していないのですから。そうしますとねえ

②C1：ハイ

CS：彼は中級を卒業したとは言え「ないわけですよ。

③C1：「ソウデスネ

この会話における②番の相づちは、先行発話に「呢」が使用された時に打たれたものである。この「呢」は、聞き手に対して送る「これからの話は大事ですよ」とのメッセージと考えられ、その後には短いポーズがある。その知らせを受けてC1が、「それに興味を持っていますから話を続けてください」という意志を表明するために「嗯」という相づちを打ったと解釈できる。一方、③の相づちは、「とは言えない」という意味の動詞が話に出た時点で、聞き手のC1が話し手のこれから言おうとすることを予め予測して打ったものと考えられる。

このように、名詞や動詞の後に使用されている相づちについては、その直前の名詞や動詞が現れた時点で、一つの情報を獲得したと聞き手が判断したものと考えられる。また、助詞「呢」「吧」「啊」の後に相づちが打たれるのは、この3つの助詞は「文中で息つきをする」「文中の息の終わる箇所に用いられ、以下に述べることについて相手の注意を引く」という機能をもっているからであろう。

一方、表2で示されているように、日本語の相づ

ちの先行発話の文法形式が中国語より多く、文が完了したところ（「終止形」）、「て」などの接続助詞、「ね」や「けれども」などの終助詞・間投助詞、「格助詞」の後に相づちの使用率が特に高くなっている。電話会話では、会話例(2)(3)で示されているように、相づちの打たれた直前の発話形式が（伸ばして発音されたり、上昇調イントネーションで発音されたりした）「て」「ね」「けれども」が非常に多い。

(2) J9：でえー言うこともあってえー、いやあーちょっと電話で面白いことを考えてえー

④J10：ウン

J9：なんか先生にそれ言ったらあ、ああやってみたら、みたいな感じだったからねえー

⑤J10：ウンウン

J9：できたらそれやろうかなーとか思っ

⑥J10：フーン

(3) J5：あのねー

⑦J6：ウン

J5：やっぱりちょっと一番最後の

J6：ええ [ええ

J5：[あの来年のっていうところー

J6：ええ

J5：なんだけど

⑧J6：ハイ

また、対面会話における話し手の「うなずき」について調べた結果、それに呼応するように相づちが多く使用されていることが分かった。

(4) JS：外国生活がはじめてだという色々な不安があると思うんですけども (#)

⑨ J3：エー<#>

JS：まあそう言う不安に対してまあ簡単なカウンセラーと言うんでしょうか (#)

⑩ J3：エー<#>

JS：そうしたらちょっとした相談にのれませう。

⑨と⑩が出る直前は話し手JSがまずうなずき、

それに反応するように聞き手となる J3 が、「エー」と言いながらうなずいている。このように、日本語の対面会話では、話し手のうなずきの直後に相づちが発生する比率は約 5 割となっており、話し手がうなずいた時に相づちが打たれやすいことが示された結果となっている。一方、中国語の対面会話では、話し手のうなずきが余り観察されていないにもかかわらず、会話例(1)の中の①で示されているように、聞き手の相づち（この場合は言語的な相づちと共いうなずきも共起している）は話し手のうなずきの有無と関係なく使用されている。

4.2 相づちの使用場所に対する認識

調査に用いられた問いと下位項目は以下のとおりである（括弧内は中国語母語話者用のものである）。

問：「相づちはどんな時に打つのがよいと思いますか。」（「你认为“嗯”“啊”“是吗”等在什么时候说最为合适？」）

- a. 相手の話にポーズが出た時
（在对方讲话的过程中出现停顿时）
- b. 一つの文（sentence）が完了した時
（在句子结束的时候）
- c. 自分の知りたい情報を獲得した時
（当获得了你想要了解的信息时）
- d. 相手側にうなずきがあった時
（在讲话人看着你点头的时候）
- e. 相手が言葉の選択に戸惑った時
（讲话人因一时找不出合适的词而语塞时）
- f. 特徴のあるイントネーションを伴った時
（例えば、「ね↑」）

なお、f 項目については、中国語では、個々の漢字の声調が決まっており、文の中で自由に変えることができないため、中国語の調査項目からこれを除外した。

すべての項目について 5（「そう思う」、4「ややそう思う」、3「どちらとも言えない」、2「余りそうとは思わない」、1「そう思わない」）5～1 の 5 段階のうち単一選択としたが、集計した回答を分析する時には、選択肢 5 と 4 を 1 つに合併し、その設問に対して肯定的な回答をしている人が被調査者全員に占める割合のみについて見ることにする。

回答に対する集計結果を表 3 にまとめる。

表 3. 回答集計結果（「そう思う+ややそう思う」の人数が回答者全員に占める割合）

	中	日
a	47.0%	38.2%
b	49.0%	55.8%
c	63.0%	34.6%
d	33.0%	42.3%
e	38.0%	23.5%
f		50.4%

両国の母語話者の回答に最も大きく違いが見られる項目は c「自分の知りたい情報を獲得した時」（在获得了你想要了解的信息时）であり、中国語において肯定的な回答をしている被調査者の割合が日本語母語話者の同一割合より 30% 近く高くなっている。これより、中国語母語話者の相づちの多くは、自分にとって必要な情報や興味を持つ内容が話に出た時に使用されるものであると考えられていることが判明した。この結果は運用実態についての分析結果と関連性があると考えられる。

一方、日本語母語話者向けの調査では、b「一つの文が完了した時」、f「特徴のあるイントネーションを伴った時」、d「相手があなづいた時」に相づちを使用すると考える人が最も多いという結果が得られた。日本語は、「て」や「けれども」「ね」で終わる文の多くは、「文が完了した」とされていることから、この意識に関する結果は運用実態とほぼ一致していると考えて良いだろう。

以上より、中国語の相づちの使用場所は先行発話の内容（情報を獲得したかどうか）と密接に関連していると考えられるが、日本語の相づちは定められた形式に対して打つものであることが示された。これらから中日両言語の相づちの使用場所の違いが出ていえると言えよう。

意識と運用の面で明らかとなった上記結果より、中国人日本語学習者が会話をしている際、話し手の話に対して内容によって相づち使用の必要の有無を判断するという母語の習慣に沿って相づちを使用する可能性が示唆される。これは、中国人学習者の相づちのタイミングが日本語母語話者と異なる原因の一つとも考えられる。

5. まとめ

本研究は、中日両言語の相づちの使用場所について意識と運用の両面から分析し考察を行い、両者の相違を明らかにした。日本語の相づちの使用場所は一定の複数の形式（特徴のある文法形式、特にこれらの形式が特徴のあるイントネーションが伴う時、及び非言語的表現であるうなずき）があるのに対し、中国語の相づちは文末の他に先行発話に定められた形式が少なく、相づちを打つかどうかは話の内容に密接に関連し、任意性が比較的高いと言える。

今回の研究結果を基に様々な観点から中日両言語に対する理解や中国人日本語学習者の自然会話の習得への示唆を求めようと考えている。

注

1. CS は中国語による対面会話における話し手、JS は日本語による対面会話における話し手；C1 や J3 は被験者となる会話参加者；数字①等は会話例において注目してほしい相づちの通し番号；#はうなずき；「一」は伸ばして発音されている；「[」は同時発話の開始部分；網掛けの部分は相づちの先行発話の形式を示している。

参考文献

泉子・K・メイナード（1987）「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』16-12,88-92

- 泉子・K・メイナード（1993）『会話分析』くろしお出版
杉藤美代子（1993）「効果的な談話とあいづちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』12-4：11-20
塚原渉／ワード、ナイジェル（1997）「理解を介さない会話現象としてのあいづち」『言語』26-10,90-97
堀口純子（1991）「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』10-10,31-41
堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版
水谷信子（1988）「あいづち論」『日本語学』7-13：4-11
楊晶（1997）「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響—形態・頻度・タイミングを中心に—」『言語文化と日本語教育』第13号 117-128
お茶の水女子大学日本語文化学会
楊晶（2002）「日本語の相づちに関する意識における中国人学習者と日本人との比較」『日本語教育』114号 90-99
劉建華（1987）「電話でのアイズチ頻度の中日比較」『言語』16-21：93-97
姜望琪（2003）《当代語用学》北京大学出版社
李悦娥・范宏雅（2002）《话语分析》上海外语教育出版社
邵敬敏主編（2001）《现代汉语通论》上海教育出版社
Clancy, P. M., Sandra, A., Thompson, Ryoko Suzuki & Hongying Tao (1996) "The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin" *Journal of Pragmatics* 26, 355—387

よう しょう／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科
yangjing57@hotmail.com